

マノアという男がいました。彼の妻は不妊の女性でした。彼女のもとに、主のみ使いが現れて「あなたは身ごもって、男の子を生む。生まれてくる子どもはナジル人として神に献げられている」と告げました。ナジル人とはイスラエルを救う者として選ばれた人の意味であると考えられます。マノアは最初、妻からみ使いからの不思議な知らせを聞いたときにも、疑うことを一切せず、むしろ神さまに祈っています。彼が最初から妻の言うことを素直に信じる事ができたのは普段から妻に対する深い信頼と尊敬があったからではないかと思うのです。16 節後半~18 節に記されているように、彼は最後まで現れた方が主のみ使いであることに気づいていません。また、またマノアが「わたしたちは神を見てしまったから、死なねばなるまい」(22 節)と取り乱す時にも、23 節に記されているように、妻はその背後にある神さまの憐れみを読み取り、賢く落ち着いて、マノアの支えになることができたのでした。聖書、特に旧約聖書、の中では、イサク、サムエルのように神さまに選ばれた子の受胎と誕生は一般に不妊あるいは高齢の女性をとおしてもたらされます。

ルカによる福音書では、旧約時代「イスラエルの時」の終焉を象徴する洗礼者ヨハネは旧約聖書に記されている偉大な人の誕生物語と同様に不妊の高齢な女性エリサベトから誕生し、新約時代「イエスの時」を導くイエスは処女マリアから誕生するのです。実際には、不妊あるいは高齢の女性を通しての方が、結婚外や結婚前の処女懐妊よりも明確な奇跡として理解しやすく、物語としても説得性があると思われます。処女懐妊はその性格上、たんに誤解か虚偽と受け取られやすいからです。いずれにしてもこれらの物語の処女、不妊、高齢という条件は懐妊と誕生が神さまの介入によることを強調し、証明するための手段です。重要なのはその誕生が神さまの介入によるものであり、妊婦の身体的条件というよりも誕生した子にまつわる神学に焦点が置かれているのです。

マリアは天使からの受胎告知に対して、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」と答えます。マリアの神さまに総てを委ねる、神さまへの信頼が現れています。信仰とはこのように、神さまの呼びかけに応答し、神さまを信頼し、私たち総てを委ねて歩むことです。信仰は単に何か真であるということを知るのではなく、信じていることに従って行動する用意があり、それに信頼しているのです。ルターの言葉を借りるならば、信仰は単に神さまという船が存在すると信じるのではなく、神さまという船に乗り、その船に自分を委ねることなのです。